

2014年2月22日、大正大学において本研究所と宗教者災害支援連絡会共催の公開シンポジウム「現代宗教とつながりの力」が開催された。宗教施設や教団、宗教者が、約3年が経過した東日本大震災の復興支援現場をはじめとして、地域社会において助け合いを後押しするはたらきに焦点をあてながら、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）として現代宗教を捉え返すために企画された本シンポジウムでは、宗教者として支援活動に携わっている諸氏が登壇した。

【パネリスト】

・久間泰弘 曹洞宗 東日本大震災 災害対策本部 復興支援室分室 主事／伊達市龍徳寺 住職

「これまでの支“援”から、これからの支“縁”へ」

・西川勢二 真如苑教務長補佐

「SeRV ボランティア活動とその後ろ」

・平澤勇一 天理教磐城平大教会長／天理教福島教区長

「たすけあいの展開 ～支援から支縁へ～」

・藤波祥子 八重垣神社宮司

「氏子の信仰に支えられて」

【コメンテーター】

・磯村健太郎 朝日新聞記者

・岡田真美子 兵庫県立大学教授

【司会】

・大谷栄一 佛教大学准教授

・弓山達也 大正大学教授

曹洞宗僧侶として、福島、宮城、岩手で震災復興支援活動に携わっている久間氏は、物資的には充足している被災地へ一方的に過剰な支援物資を供給するといった、現場の状況を見ない支援の押しつけが、かえって被災者の自立を妨げる問題を生じさせていることなどの問題を指摘しつつ、これからは、被災者の自立を助けるために、支援者と被支援者の時間的、空間的な協働作業が重要であることを提起した。しかし、そうしたなかで、被災者への共感と同化（中立的、客観的視点の喪失）とが混同されてしまうという問題性を指摘し、支援のなかで支援者自身が自らを問い直すことが支“縁”——支援者と被支援者の協働——であると述べた。

西川氏は、阪神淡路大震災時以来の SeRV（真如苑救援ボランティア）の活動について紹介した。SeRV の活動自体は宗教色を一切もっていないが、支援対象には信者も含まれてお

り、また、支援者は信者によって構成されている。支援活動のなかで被支援者も支援者もともに支えを必要とする状況のなかで、現地入りした苑主よりの言葉やメッセージカード、また祈り・瞑想によって内省する「接心」といった“信仰”がその支えとなっていることを報告した。そして、さまざまなプログラムによって、一步一步、人々へ寄り添っていく営みを継続していく決意が表明された。

天理教の平澤氏は、被災によってさまざまなもの失ってはじめて、それらのありがたさに気づいた体験を述べながら、人々の間で目覚めた助け合いの心が、時間が経って平常化が進むとともに見失われつつあることを指摘した。また、被支援者が他の被災者の支援活動に参加する動きも生まれていることを報告し、今後は、そうした支援活動によって生じた「縁」を後押ししていく活動へとシフトしていくことが重要であると述べた。

被災により神社も自宅もすべてを失ったという藤波宮司は、被災後に、人々の宗教心が、被災によっても失われることのない変わらないものを求めて、あるいは宗教的時間・空間でしか得られないものを求めて、失われた社殿への参拝、お祭りの開催といったかたちで表れていった様子を報告し、故郷とのつながりやコミュニティにおける人のつながりを失った被災者に、悩みや苦しみを解放する機会となる、また、つながりの力をもたらず神社や祭りの意義について報告した。

コメンテーターの磯村氏は、宗教を外側から見た立場として、宗教による支援活動の人員、物資の調達力、資金面での貢献力に、継続的な支援活動を可能にするソーシャルキャピタルとしての底力を実感したこと、NPOなどの他の支援団体と比べて、宗教が中・長期的な支援活動で大きな力を発揮するのではないかと述べた。また、支援する宗教者が、直面する困難と信仰のあいだを往復しながら、寄り添いやつながりの力を生み出す点に触れながら、宗教は支援活動のなかで何ができるのか、何ができたのかを問う一方で、何ができなかったのかを問うことによって残された課題が何であるのかを問うこと、あるいはまた、被災地や被災時に限らない平素の社会のなかで何ができるのかを問うことを提起した。

岡田氏は、パネリスト各氏の発題をまとめながら（図参照）、被災地での支援活動において、支援活動が利益追求の活動になっている例があることに注意を促すとともに、東日本大震災は「原発震災」という新たな側面をもち、それが長期にわたって影響を及ぼし続けること、また、被災者のあいだにもたらした分断が非常に深刻であることを指摘し、長い時間感覚によって物事をとらえる宗教者はこの原発震災のなかで大きな使命を負っているのではないかとコメントした。

100名近い参加者からも、支援活動におけるとりわけ宗教的なケアのなかでの信者でない人々への対応について、あるいはそうした際の宗教的な言葉の可能性についてなど、さまざまな質問等が寄せられ、活発な議論が交わされた。